様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 18 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間： 2006-2008
課題番号：１８５３０４６８
研究課題名（和文） 家族レジリエンスを促進するソーシャルワーカーと家族の会話プログラムの開発的研究
研究課題名（英文） Development of Social Workers' Conversation Program Empowering Family Resilience.
研究代表者
得津 愼子（TOKUTSU SHINKO）

研究成果の概要：知的障害者家族とその施設職員の聞き取り調査とその分析によって、家族が困難な日常生活を普通の生活として過ごすプロセスのキー概念は、様々なアンビバレンスを乗りこえる現実構築力であると洞察された。また、そのプロセスを支えるベテラン施設職員は、家族をシステミックに捉え、その変化と再生を促進するように支援しており、言語的・意識的に語りはしなくても、家族の自己回復力、可塑性を、家族の力が発揮できるような側面的支援や状況設定に苦心していることが明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
２００６年度	1,400,000	0	1,400,000
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総 計	3,300,000	570,000	3,870,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学
キーワード：家族レジリエンス、エンパワメント、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ、質的調査、家族レジリエンス尺度、修正デザイン・アンド・ディベロップメント、障害者、障害者家族

１．研究開始当初の背景

研究開始当初は、自立支援法の成立直後で、地域で支える当事者主体の自立生活が推進され、本人主体が叫ばれていた。その中で家族の位置づけや、家族主体の家族支援については余り語られていなかった。日本における家族は未だ「無尽蔵」に使いうる社会の含み資産であると考えられているように思われた。また、日本におけるファミリーソーシャルワークの実践理論は皆無に等しく、家族支援のための具体的ツールは散見されるのみであった。また、家族レジリエンスも一般的な概念ではなかった。そこでまずは、ワルシュ（Walsh, F.）[i]のレジリエンス概念により、困難から回復する家族の力を明らかにし、ファミリーソーシャルワークの具体的な方法論の端緒となすことを企図した。家族レジリエンス概念とは、家族には逆境にあっても回復する可塑性、復元力がもとより備わっており、支援者はそれを促進しうるように関わることが肝要であるとしたものである。

日本において、現在ソーシャルワークの方法論として一般的に採用されているジェネラリストアプローチで欠かせない視点の一つとしてストレングスアプローチやエンパワメントアプローチ等の社会構成主義アプローチは優勢なアプローチであるとされているが、具体的方法論は多く説かれていない。そこで家族レジリエンス概念に基づいた家族や当事者の力を促進するソーシャルワーカーの家族への働きかけの具体的方法を示すことが喫緊の課題であると考えられた。

２．研究の目的

本研究の目的は、まずは、家族の困難な日常生活やそれを乗りこえて「サバイバル」するコツやプロセスを明らかにし、家族レジリエンス概念の有用性を検討する。そして、家族がそのレジリエンスを活性化しうるようなソーシャルワーカーと家族や利用者の会話をプログラム化することを目的とした。研究を実証的に進めていくために芝野（2002）[ii]の修正版デザイン・アンド・デベロップメント（MD&D）の手順によって、「家族レジリエンス促進『会話』プログラム」を開発することとした。プログラムは、MD&D の第１段階問題の把握と分析、第２段階プログラムの叩き台デザイン、第３段階試行と改良までを行う予定であった。本プログラムが「会話」プログラムであるのは、社会福祉現場においてソーシャルワーカーが家族と関わるのは「面接」のような構造や枠組みを伴う場合よりも場面対応的な設定の方が自然で汎用性が高いと発想したからである。

３．研究の方法

⑴　文献研究

①　家族への具体的な方法論として欧米のファミリーソーシャルワークや家族支援の先行プログラムを調べる。

②　障害者の自立と障害者家族、とりわけ受容のプロセスについて主要な理論を批判的に検討する。

③　社会構成主義の理論とその立場をとるエンパワメントアプローチ、ストレングスアプローチ、ナラティヴアプローチ、解決志向ソーシャルワークなどの実践理論に語られている家族の力（ストレングス）や主体について考察する。

④　質的研究法の文献研究を行う。本研究の調査における、知的障害者家族の日常生活のプロセスを知りたいというプロセス性や固有性から、本研究は質的研究に馴染むと思われ、それを的確に示しうる分析方法を決定する必要があった。量的研究法によらない質的研究法の有効性を示す理論と、その実証性、説明力を高めるための調査の方法論を研究することによって本調査により適した研究

法とその分析方法について検討した。これらの文献研究によって、今日の日本で筆者にとって有用であると思われるファミリーソーシャルワークの基本的スタンスを明らかにすることが、本文献研究の目的であった。

⑵　質的調査

①　X 福祉会にてベテラン職員へのフォーカス・グループ・インタヴュー（FGI）。全３回で内容分析にて分析を行った。

②　X 福祉会にて知的障害者家族への聞き取り調査。１３名の親に対して行った。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）（木下、1999）[iii]にて分析し、３回のグループスーパービジョンを受けて、信頼性を高めた。

③　X 福祉会にてフィールドワークワークを行った。X 福祉会の中心的リーダーたちの聞き取りと現場観察や、資料探索など。

④　男性中途障害者家族への系時的な聞き取り調査の第２・３回目を行った。

４．研究成果

⑴　文献研究によって、家族ソーシャルワークの具体的方法論として、家族レジリエンス概念は今日的な社会構成主義的アプローチにおいて家族の可塑性を促進する具体的方法であると考えられた。「本人主体」を強調しようと、すまいと、これまでの一般的な家族の見方や家族とのかかわり方のステレオタイピングからより家族主体の実践にシフトするにあたって有用な概念であることがうかがわれた。

⑵　X 福祉会にてベテラン職員への FGI によって、職員のシステム論の知識やよって立つ理論の有無を問わず、システミックに家族を見ていることが明らかになった。かれらは家族生活には変化が付き物であり、その変化を意図的に起こすことを日常的に考えていた。また、事例展開の過程それぞれでの段階に沿って、具体的な家族への働きかけのポイントや留意点を持っていることが明らかになった。極めて、受容・傾聴を重要視する態度と、危機的状況に際しては、速やかな緊急の危機介入を行うなど柔軟な対応が顕著であった。また、「本人主体」の支援を心がけており、家族はあくまでも「本人主体」のサポーターであるという立ち位置が明らかにされ、「家族には家族レジリアンスがある」と思っているというよりも、かれらが家族のレジリアンス－家族の持てる力-を発揮できるようなサポートを心がけているとしていることが明らかになった。

⑶　X 福祉会における強度の行動障害を示す知的障害者家族の聞き取り調査を M-GTA による分析で行った。質的調査の分析方法として、その社会的相互作用やコンテクストを重視する点で M-GTA が本調査の分析には適していると思われ、また、より現場実践に役立つツール開発のための問題の把握と分析としては、家族レジリエンスを解明するよりも、探索的に新たな概念を生み出していく方がより現実的であることがわかった。

その結果としては抽出された概念間のそれらの相互関係性を見ていったところ、「強度の行動障害を呈する知的障害者の家族がその非日常的な暮らしの中で、日常生活を維持していくプロセス」に浮かび上がってきた中心的概念（コアカテゴリー）は、＜安心立命＞[iv]に至るプロセスと、そのプロセスを支える＜アンビバレンスを乗りこえる現実構築力＞であった。家族が障害をもった子どもと永年暮らしていくプロセスは、まず【何しろ障害】らしいと右往左往するが、その【初動への原動力】は所与のものとして選択の余地や考えるいとまもない自然の成り行きで、［予め約束された家族の引き受け］である。［専門家集団の影響］も受け、【腹を括って

この子と生きる】覚悟を決め、それから【孤軍奮闘のプロセス】が続く。それは［自分の魂にやすりをかけられるような日々］なのであるが［子どもとの関係の変化］が起き、【普通の暮らし】にたどり着く。【普通の暮らし】は［終わりよければすべて良し］な［たどりついた平常心］の境地であるが、［親なき後対策］も必要となって『見果てぬ夢』は終わらない。

その【プロセスを支えるコツー信念化された力】は［自負心］、［ほどほどな距離感］［自分で選ぶ具体的な支え］である。【支えの軸となる社会福祉施設】の存在は大きいが、それには【お世話になることのアンビバレンス】も伴う。家族を駆り立てる原動力の多くは【家族の二重拘束的必然】、つまり「本人主体で自律的にサポートせよ」という「本人と家族」、「家族と社会」の入れ子になった二重の二重拘束的状態である。だが、家族はその社会的役割に極めて素直に応じようとして力を尽くす。

知的障害者の家族の日常生活は障害を持った子どもや、並々ならぬ困難な日常が「普通」になっていくプロセスであった。そこでの現象特性の第１は、決して思い通りにいかない日常生活の現状を、肯定的なものへと変換させる過程である。それは、単に絶望から受容へと直線的に変化するのではなく、絶望と期待、安心立命と見果てぬ夢を見る繰り返しのプロセスである。問題や困難、「普通」と「非日常」がメビウスの輪のように、行きつ戻りつする長い過程であり、外部からの刺激に何とか対応しながら、家族、あるいは親は外部からの刺激に何とか対応しながら、それが普通の暮らしであると納得しつつ進んでいくのである。つまり人の行為は社会的相互作用[v]によって意味を付与され、相互影響過程としてそれぞれの行為を再生していくのである。

第２は、その受け入れがたい現実を受け入れる原動力、駆り立てる力に関わる概念間の関連性である。そこに浮かび上がってきたのは、自分自身の資質、施設も含めた社会資源、そして家族の力であった。ところが、それらはただ家族を支える資源というよりも、それを資源化する家族のプロセスであると考えられた。自分に必要な資源を自分に役立つように使う力である。それは、自己説得、納得を続ける自分とまわりとの相互作用の過程にある。家族は家族について自分が持つ意味に則って行動し、それは社会的、あるいは、家族やまわりの期待から導きだされ、さらにその行為の意味は社会的相互作用から新たに創出され、家族が対処するなかで、その解釈の過程であつかわれたり、修正されたりして、自らの行為に付与した意味が、行為によって社会的リアリティを構築していく繰り返しなのである。家族は、日々の日常の中で、ズレやアンビバレンスを感じても、自らが行為しうるように意味付けを行い、修正し、切り捨てるものは切り捨てて、日常生活をこなしていく。そのために、家族が使うのは、公的資源、私的資源を問わず、自らの意味世界で有用と思われるものである。その取捨選択する力、修正する力こそが家族の力であるように考えられた

本調査の結果、具体的なサポートについての示唆も多かった。家族は障害をもった子どものためにその凝集性を高める場合もあれば、そこでひび割れてバラバラになる場合もある。そうした場合に調整や、とりあえず今の家族に求められる例えば父親の機能などを施設が補完する場合もある。

知的障害者の家族は、ともすれば子どもの障害を受容するプロセスに焦点があてられがちであるが、そのプロセスは一様でなく、そのゴールを何に求めるかについても議論のあるところである。また、当然家族の変化、

本人やきょうだいの発達・成長や加齢、外部社会からの影響等、多くの事柄の影響を受け、恒常的な安定よりも、その変化に対応することが重要な課題であると思われる。とりわけ強度行動障害者の場合、変化（課題やチャレンジ）と安定の繰り返しであり、恒常的な安定を求めるよりも、その変化に対応することが重要な課題である。その行動化の常ならぬ困難な状況からも家族がともに行きていくための充分なサポートが必要である。

⑶　中途障害者家族の聞き取り調査は、５年間に３回（2003，2006，2009）、家族全員で行われた。５０代後半の中途障害者の男性とその妻と長男の３人家族であった。、家族レジリエンスについて説明し、強調して、「家族が危機を乗りこえた決め手は何でしたか？」という質問で、家族に話し合ってもらった。分析の結果、現実的な安定と家族間のパワーバランスが連動して、家族の安寧を維持しているように思われた。確固たる家父長であった男性に介護が必要となり、妻に家族のリーダー役割をバトンタッチするまでのプロセスは家族の危機的状況であった。オチバーグ家族危機理論の後危機段階[vi]を乗り切る大きな切り札は、家族間のパワーバランスであったと考えられ、それを支えた家族の力が家族レジリエンスであると思われた。その資源は家族そのものであったが、親戚・友人・医療ソーシャルワーカー、医療・介護のための社会的資源なども有用であった。その役割交替に、本聞き取り調査が儀式として機能したことがうかがえ、家族レジリエンスを強調する本調査にはセラピ−的側面もあるのではないかと思われた。

これらの調査の結果では、具体的なサポートや資源の有用性が改めて浮かび上がってきた。施設の長、施設職員、医療ソーシャルワーカー等は大きな役割を果たしていた。サポートの専門家は、まずは、速やかな状態の把握をした上に、本人の状態にあわせて、本人や家族にとっての居場所や家族にとって必要な社会資源を提供することが求められている。

また、家族の揺れに際しては、システムが変化するためには、一端形を変えたり、緊張が極めて高い状態や場合によってはそれまでの形が崩れたりすることが必要であり、その後どのように再構築していくかが、むしろ決め手である。

家族主体の家族支援とは、その家族の現在の行為、予測される行為が、家族にとって過重な引き受けとならないような家族との対話であり、少しでも家族がニーズとズレがなく、アンビバレンスを感じることが少ない社会資源の豊富なメニューであり、その調整であると考えられた。

これらの結果から、知的障害者家族と職員との対応プログラムを作成した。このプログラムは、当初は、障害者家族とソーシャルワーカーの場面対応的なプログラムの予定であったが、調査の分析対象が長期にわたるプロセスとなったため、場面対応的なプログラムよりも長期的なプロセスを包括したプログラムとなった。それぞれの時宜を得た働きかけや対応のポイントをプロセスに添ってプログラムした。本プログラムは、そのフィールドとしたＸ福祉会を中心として行われている研究会で発表の上、施設での試行を依頼し、第３段階の試行と改良を行う予定である。本プログラムの試行と改良の後にそれぞれの時間的スポット中心の場面対応的プログラムの開発をしたく、今後の課題とするものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）
① 得津慎子、社会福祉における家族支援ー家族ソーシャルワーク方法論に向けて、関西福祉科学大学紀要第９号、査読無、2007、67-80.
② 得津慎子・日下菜穂子、家族レジリエンス尺度(FRI)作成による家族レジリエンス概念の臨床的導入のための検討、家族心理学、査読有、20(2)、2007、99-108.
③ 得津慎子、お母さんあってこその家族-家族の危機と回復の聞き取り調査からー、関西福祉科学大学紀要第１０号、査読無、2007、41-53.
④ 得津慎子、家族レジリアンス概念の有用性-知的障害児・者施設のスーパーバイザークラスのベテラン職員のフォーカスグループインタビューから、関西福祉科学大学紀要第１１号、査読無、2008、41-53.

〔学会発表〕（計　５件）
① 得津慎子、The Useful Application of the Resilience-oriented Family Practice in Japan、IFSW(International Federation of Social Workers) World Conference、2006 年７月、ミュンヘン
② 得津慎子・日下菜穂子、A Study of Depression in the Elderly, Considering the Relationship among the Factors of Family Resiliecne, Health Conditions and Social Role、IFTA(International Family Therapy Association) XV World Conference、2006 年 10 月、レイキャビク
③ 得津慎子、家族支援にあたって家族レジリアンスに着目することの有用性-知的障害児・者施設のスーパーバイザークラス職員のフォーカスグループインタビューを通してー、日本家族研究・家族療法学会第 24 回全国大会、2007 年 6 月、京都
④ 得津慎子、強度の行動障害を呈する知的障害者の家族が家族生活を維持していくプロセス-知的障害児家族の聞き取り調査から、日本家族研究・家族療法学会第 25 回全国大会、2008 年 6 月、東京
⑤ 得津慎子、Focus Group Interviews Regarding Family Resilience for Social Work Supervisors at a Social Work Agency for People with MentalRetardation、IASSW(34th Biannual Congress of the International Association of Schools of Social Wor、2008年７月、ダーバン

〔図書〕（計　１件）
① 得津慎子、ミネルヴァ書房、人口減少時代の社会福祉学、2007、35-45

６．研究組織
(1)研究代表者
得津　慎子（TOKUTSU SHINKO）
関西福祉科学大学社会福祉学部社会福祉学科・教授
研究者番号 50309382

---

[i] Walsh,F(1998).*Stengthening Family Resilience*. NY: The Guilford Press.
[ii] 芝野松次郎(2002)社会福祉実践モデル開発の理論と実際、有斐閣。
[iii] 木下康仁（1999）『グランディッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生』弘文堂
[iv] M-GTA では、生み出された概念の関係性を説明するためにストーリーラインと結果図を示す。本報告書には、そのストーリーラインの一端を示したが、概念名は『』、サブカテゴリー名は［］、カテゴリー名は【】、コアカテゴリーは＜＞で示される。
[v] Blumer, Herbert(1969)*Symbolic Interactioninz:Perspective and Method*. Englewood Cliffs.（＝1991　ハーバート・ブルーマー著　後藤将之訳（1991）『シンボリック相互作用論：パースペクティヴ゛と方法』勁草書房
[vi] Ochberg, F. M. Gift from within: Posttraumatic therapy, Psychotherapy, 28, 1991